

## 【聖書】

使徒言行録 9:26 サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。27 しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。28 それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。29 また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。30 それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

コリント信徒への手紙 I 12:12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。19 すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。21 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。22 それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。23 わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようと、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。24 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。25 それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

## 1 今まで

使徒言行録第九章には、サウロの回心後の記事が続きます。イエス・キリストを信じる者達を迫害していたサウロ。ダマスコ近郊で復活の主イエス・キリストと出会い、対話するという経験をします。これが彼の人生を180度変えました。自分達が十字架に架けて殺したイエスは神からの救い主であり、神によって甦らされ今も生きて働いておられる、と知った事が彼を変えました、迫害する者、人を憎む者から、迫害されつつも人を愛する者へと変えられた、と言えるでしょう。しかし、現実には厳しい。イエス・キリストを信じたからと言って、それまで彼がやってきた行いが消えるわけではありません。イエス・キリストを信じる者達には、「今までさんざん酷いことをしてきたやつだ」と信用されない、古巣のユダヤ教の人びとからは、裏切者として憎まれる事となる。まさに四面楚歌。絶望的状况です。

ですが、神は、サウロを助けてくれる仲間を与えてくださいます。アナニアをはじめとした仲間の助けを受けて、サウロはダマスコで情熱的に伝道します。そして、ダマスコのユダヤ人の中から、イエス・キリストを信じる人々が現れます。サウロの伝道が成功すればするほど、イエスを信じないユダヤ人との対立は激しくなることは避けられません。サウロは、ユダヤ人たちの襲撃を間一髪で逃れ、エルサレムへと向かうこととなります。

命からがらたどりついたエルサレムでも、サウロを待っていたのは冷たい視線です。彼は、もともとエルサレムで散々教会を迫害していたのですから、無理もないことです。この時点でサウロがイエス・キリストを信じるようになって、三年以上の歳月が流れていたようです。か。回心前のサウロが、先頭に立って熱心に教会を迫害し、酷いことをしていた記憶が三年でなくなるわけがありません。

ですが、ここでも、神はサウロに助け手を与えてくださいました。バルナバという信徒がサウロを受け入れ、エルサレムの教会の人びとに執り成してくれます。バルナバは、第四章の終わりに少し出てきます。サウロと同じギリシャ語を話すユダヤ人であり、使徒達の伝道によりイエス・キリストを信じた人。使徒達から「慰めの子」と呼ばれており、誰からも愛される人格者だったようです。そのバルナバが、サウロを使徒達に引き合わせサウロの回心を説明したので、サウロは使徒達と自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった、とルカは語ります。これだけ読むと、エルサレムでのサウロは、使徒達やエルサレム教会の人びとと一致協力して主イエス・キリストの福音を宣べ伝えていたように読めます。

## 2 ガラテヤ書との齟齬

一方、サウロ、つまりパウロは、最初のエルサレム教会訪問の様子をガラテヤ信徒への手紙で次のように記しています。「私はダマスコでイエス・キリストに出会ってから三年後、ケファ(ペトロ)と知り合いになろうとエルサレムに上って十五日間、ケファ(ペトロ)のもとに滞在しました。他の使徒達には誰にも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。わ

たしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているのではありません。その後、わたしはシリア及びキリキアの地方へ行きました。キリストに結ばれているユダヤの諸教会の人びととは顔見知りではありませんでした。ただ彼らは、『かつて我々を迫害していた者が、あの当時滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている』と聞いて、わたしのことで神をほめたたえておりました」(ガラテヤ書 1:18～24)。

明らかにルカが今日の聖書で書いている状況とは、ニュアンスが異なります。これだけ読むと、サウロはペトロと主の兄弟ヤコブ以外のエルサレム教会の人びととは殆ど交わりを持たなかったようです。ガラテヤ信徒への手紙は、サウロ、つまりパウロ自身が書いた手紙ですし、しかも、彼はここで「神の御前で断言する」とまで言っているのですから、こちらの方が正しい、と考えるのが普通でしょう。では、ルカは不正確なこと、真実でない事を記しているのでしょうか。

そうではないのです。歴史というものは、物事が起こっている当座よりも、後になってからの方が、その出来事にどういう意味があったのか、あの時、何が起こっていたのか、よく分かるものだと思います。昨日、私達は、S.N 兄の葬儀礼拝式をささげました。N 兄が初めて横浜ナザレン教会を訪れた時、誰も彼がその後73年間も教会に通い、教会を支える柱になるとは思いませんでした。しかし、N 兄が初めて教会に来た時に居合わせた S 兄が、70年以上経って、その時を振り返り、次のように言いました。「まさに神さまが手を引いて、N さんを横浜ナザレン教会に連れて来たとしか思えない」と。私もそう思います。真実は後になってからはっきりと判ることが多いのではないのでしょうか。

ルカが使徒言行録をまとめたのは、紀元後80年代後半から90年代だろう、と言われていきます。サウロが伝道していた時代から40年～30年後。サウロの当時とは、教会をめぐる環境は大きく変わっていました。ルカは、教会の最初期の激動の歴史を数十年後になって振り返り、祈りつつ、全体を見渡し考えたのだと思います。そうして、「12使徒達とサウロ(パウロ)達が協力して伝道し、教会を形成していった」という真実を示され、使徒言行録に記したのだと思います。

確かに、「異邦人が救われるには、先ず割礼を受ける必要がある」と主張するエルサレム教会の一部の人びととサウロ(パウロ)の間には、福音理解を巡る激しい論争が続きました。パウロは、「イエスをキリストと信じる以外に何の条件も要らない」と信仰義認を主張します。エルサレム教会で「異邦人にも割礼が必要」と主張していた人々が多かったのは事実のようです。エルサレムでも高まりつつあったローマからの独立運動が大きく影響していたのではないかと考えられます。ガラテヤ信徒への手紙は、割礼が必要と主張する人々との論争の最中に書かれたものです。しかし、激しく対立し議論しつつも、主イエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝えることでは一致していましたし、互いに助け合ってもいました。現に、エルサレム教会は、パウロを異端者として迫害したとは、パウロ自身の手紙にも書かれてはいませんし、パウロは後に経済的に困ってしまったエルサレム教会のために献金を集めます。

### 3 神の経綸

そして、これこそ、ルカが言いたい事ではないか、と私が思うことがあります。それは、異なる立場の者達が教会の中にいたからこそ、パウロは、祈りつつ、イエス・キリストの十字架と復活の意味を徹底的に考え抜くことができた、ということです。彼は、深めて行った福音理解を盛んに手紙に記し、自分が設立した教会に送ります。このパウロが書き残した手紙が教会の間で回覧され広がって行き、新約聖書に収められ、うけつがれ、2000年の教会の歴史を導いてきました。例えば、カトリック教会が腐敗し切った時代に現れた宗教改革者マルティン・ルターを支えたものは、パウロの「信仰義認」の考え方です。できたばかりの教会の中に対立も何もなかったら、パウロの手紙もなく、その後の教会が悔い改めることもできず、歴史の中に消え失せたかもしれません。教会の中の論争と対立が、教会の福音理解を深め、鍛え、強めたと言えます。ですから、ルカは、31節で「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。」と書いたのではないのでしょうか。

教会の中にある対立が、人間的な力だけで克服でき平和を保つことができるのなら、「主を畏れ、聖霊の慰めを受け」とは記す必要はありません。教会も、人間の集まり。色々な対立や軋轢があって当然であり、理想化すると嘘となります、偽善となります。教会の中には、色々な人間の現実がある、対立がある。しかし、だからこそ、主なる神、イエス・キリストを畏れ敬い、聖霊の助けを得て、人間の現実を乗り越えていく、それが、教会の基礎的な力となったのだと思います。神の御業の不思議さを思わずにはいられません。神は時として、人間の目には好ましくない事も、善き道への入り口としてくださいます。

#### 4 教会はキリストの体

また、今日の聖書の言葉が暗示する初代教会の状況は、私達に次のことも教えてくれます。教会は、異なる立場の者を必要とするのだ、ということです。神を神として畏れ敬い、聖霊の導きを受けて歩む点は共通していなければなりません、人間的な立場は様々であるのが教会です。自分と異なる立場だから排斥する、それでは決して教会はキリストの体にはなりません。そのことを記したパウロの言葉が、今朝の礼拝のもう一つの聖書として与えられました。異なるもの同士だからこそ、大切に思い合う、特に弱いと見える部分を大切に、それが教会の本来の在り方です。

ここで、パウロが力説しているのは、教会に属する者、誰一人として全体になれる人はいない、皆、イエス・キリストの体を構成する一部である、ということです。足や口の譬えは面白くて、説得力があります。ここを読むと教会の仲間にさえ抱く優越感や劣等感、嫉妬やそねみ等は、まさに神に対する罪であるし、教会を教会でなくしてしまうものであることを、思い知らされ、悔い改めずにはおられません。

詩人・金子みすずの有名な言葉「みんな違ってみんないい」というのを思い出した人もいるのではないのでしょうか。ここで書いていることは、金子みすずの言葉よりも、もっとすごいこ

とです。みんな違ってみんないい、だけでは、バラバラのまま。お互いに補い合っただけでは、はたらきをするには、まとめあげる存在が必要です。教会の場合、それがイエス・キリスト。そして、教会の頭である主イエスの御心を教えてくださるのが私達の中に注がれ住んでくださる聖霊です。このお方は、私達が、それぞれの個性を生かしつつ、お互いに大切に思い合っていくこと、互いに補い合っただけで教会を造り上げる力を私達一人一人に与えてくださるのです。

## 5 主イエスの一部を映す

この聖書のみ言葉を思いつつ、N兄の葬儀説教を考えていて、私は一つの愉快的な考えが与えられました。N兄は毎日、聖書を必ず読んでお祈りをささげていた、彼はイエス・キリストの弟子として歩んできた人です。弟子とは、師匠に学ぶ者達。「学ぶ」の語源は、「まねる」であるように、キリストの弟子とは、主イエス・キリストの在り方をまねる者達、と言えるでしょう。そういうと、「神の独り子の在り方をまねることなど人間に出来る筈はない！」と憤る方もいるでしょう。ですが、私達が主イエス・キリストの真似ができるように、と神の独り子は真の人になってくださったのです。そうでなければ、主はどうして「私のあとに従いなさい」と言われるのでしょうか。イエス・キリストの在り方をまねようとすることは、神の御心に適う、祝福された事です。

そして、じっくりと時間をかけてまねをしていくと、段々、まねてる人に似て来るものだと思います。つまり、主の弟子は、主イエスに似て来る、主の姿を映すものとなる、と言えます。勿論、全部ではありません。子なる神が真の人となった方、主イエスを全体的に映し出すことが出来る人などいる筈はありません。しかし、限定的になら、部分的になら、主イエスに似て来ることができます。N兄にもそのような一面がありました。満子姉が、「Nはお祭り人間ですから」と言っていました、彼はお祝いの場所で皆を楽しませ自分も楽しむのが大好きな人であったことは衆知の事実。その姿は、主イエスのお姿の一部を映し出しているようです。主イエスは、ファリサイ派の人から「大酒飲みの大食漢」と非難された方、カナの婚礼に喜んで参加し、水をぶどう酒に変えた方、きっと多くの人びとと音楽や料理を共に楽しむことが大好きだったお方だったでしょう。喜びの主イエス・キリストですから。N兄もクリスマス祝会などは多彩なかくし芸で皆を楽しませてくれました。しかし、その一方、礼拝への姿勢はとても真摯でした。礼拝開始直前までお喋りしている人には、「いつまで喋ってるんだよ」という少々厳しい言葉が飛びました。そんな彼の姿を思い出すと、ああ、本当にN兄はイエス・キリストの姿を映し出していたな、と思うのです。N兄だけではありません。S.K牧師は、神のみ言葉の本質をずばりと語る主イエスの姿を映していた。S姉妹は、惜しまず人を愛し、友なき人を訪ねていき奉仕するイエス様の姿を映し出していました。

このように、主イエスのお姿の一部分を映し出す者達が集まり、教会という一つのイエス・キリストの体が立ち上がって行くように思います。「自分は弱くて体も悪いし何もできない」と嘆く必要はありません。その弱さは主イエス・キリストの重要な一部です。主イエスは十字架

の上で最も弱くなったださったのですから。弱いからこそ父なる御神を求め知ることができし、そのことを皆に伝えることができます。誰一人として、「主イエスに似るような事は何もできない」と諦める必要はありません。どんなに病気などの重荷を負うていても、神に向かって祈ることはできます。主イエスは何よりも祈りの人でした。「私はイエスの事は何も知らない。イエスさまの真似は出来ない」と尻込みする必要もありません。主イエスについて知らないのは皆一緒です。子なる神が人となった方を完全に理解できる人などいません。理解できないからこそ、学び続けるのです。イエス・キリストに従って歩むことを学び、主を知り続けます。そんな歳月を重ねて行くと、自然と主イエスに似て来るところが現れるのだと思います。その為に、私達、イエス・キリストの弟子達は、礼拝を捧げ続けます。礼拝しなければ、父なる御神も、主イエス・キリストも分からないからです。

教会にたどり着き、教会の中で生き天に召された諸先輩達が私達にそのことを教えてくれています。ヘブライ人への手紙12:1～2には、聖書の登場人物を列強した後、次のように語ります。「こういうわけで、わたしたちもまた、このように夥しい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」

私達の教会の諸先輩達も、イエス・キリストの証人の群れに加わり、私達の教会をぐるりと囲み包んでくれています。ですから、人数がめっきり少なくなった、寂しくなった、と嘆く必要はありません。私達一人一人が諸先輩達に倣い、イエス・キリストのみ跡に従い、主の御姿の一部を映し出したいと願いつつ歩めば、必ずや新しい教会がこの地上に姿を現します。今までにない教会、イエス・キリストの体はいつもこの地上に新しいのです。このような希望を与えてくださる父なる御神に感謝します。